

3. 世界一短いお経「南無阿弥陀仏」

落語にあるように「お血脈」は極楽行のパスポートとして大流行した。正式には「融通念仏血脈譜^{ゆうづうねんぶつちみやくふ}」という。この融通念仏については、宗教民俗学を提唱した五来重^{ごらいしげる}氏が「融通念仏は一つの宗派でも学派でもなく、一種の宗教運動で、名帳に名を連ねて同志となり、ともに念仏を唱えるものは、その功德をたがいに融通して、現当二世の莫大な利益を得られるとの主張にすぎない」(『融通念仏、大念仏および六斎念仏』大谷大学研究年報第十四)と分析している。善光寺の念仏は融通念仏であり、それゆえ宗派の別なく万人に受け入れられた。

(1) 等順名号塔^{とうじゆんみょうごうとう}

① 松本城下町の善光寺念仏講^{ねんぶつこう}

善光寺別当^{べつとう}*1 等順 (1742~1804) は「如来さま」「善光寺さま」と敬われ、中信地区に多くの名号塔を残した。松本市では43基の等順名号碑が確認されている*2。これらは寛政2年(1790)から天保11年(1840)にかけて建立された。さらに、入山辺から中山にかけて「善光寺」と呼ばれる場所が数ヶ所ある。これらはすべて善光寺念仏講*3の存在を示すもので、等順の化益*4により念仏講が組織化され、村々の中で名号塔造立へ進展したものと思われる。その影響力は凄まじく、当時の松本城下町は善光寺一色になっていたといえる。

【善光寺街道松本市域の等順名号塔】



庄内栄橋南

沢村・賢忠寺跡

安原・十王堂跡

松岡墓地

本郷西原墓地

刈谷原峠

浄雲寺

*1 善光寺別当；別当とは古来寺院の長官を指す用語。善光寺は平安後期に園城寺の末寺となって以降、中央寺門派の僧が任命され、現地では代官として権別当が統括していた。戦国期にあつては栗田氏の支配となったが、江戸時代は大勧進住職が別当として善光寺を統括することになった。

*2 松本市の念仏塔調査；松本市は平成27年度に市内における念仏塔の悉皆調査を行っている(『松本の念仏塔と念仏行事調査報告書』松本市教育委員会)。これにより43基の等順名号塔が確認された。

*3 念仏講；松本市本郷横田の記録によれば念仏講は年に春秋2回行われて春は「お八日念仏」、秋は「お十夜」として念仏が講じられていた。一般に講仲間による念仏は導師役が鉦を鳴らし人々は輪になって念仏を唱えながら大数珠を繰り回す。ひときわ大きな数珠が巡ると一礼し、全員にめぐると一回りとなる。『芋井三宝記』(江戸時代末)に「六月晦日の夜、善光寺では盂蘭盆会といって、妻戸の太鼓や雲板を打ち鳴らしながら、参詣の諸人が礼堂の辺りで百万遍の数珠をくりながら大声を上げて念仏を唱え、この夜の念仏を貴(とうと)念仏といった」との記述がある。

*4 化益；僧侶など宗教者が大衆に対し教化して善に導き利益を与えること。

② 善光寺聖としての等順

善光寺別当大勧進第80世住職等順は現在の御開帳の基礎を築いたといわれる。等順は現本堂を宝永4年(1707)に建立した慶運(1663~1729)と比較されるが、慶運は政治的人脈により江戸幕府を後ろ盾に大事業を成し、善光寺の発展に寄与した。

それに対し等順は、庶民を対象に草の根の信仰を集め、



国宝善光寺本堂

庶民の寺として確固たる寺風を築いた。宗派を問わず、数多ある全国の善光寺を総本山として統括するでもなく、融通念仏の確信を以て全国に講組織を促し、「融通念仏血脈譜」授与という具体的方策で信仰の伝播を劇的に加速させた等順の功績は、歴代別当中筆頭に挙げられる。

③ 浅間山大噴火と等順

等順がなぜ民衆に目を向けたのか。そのきっかけが浅間山の大噴火による被災者の救済であった。等順は善光寺の門前で生まれ（善光寺宿脇本陣美濃屋）、徳川將軍家の菩提寺である寛永寺の護国院へ12歳で入寺し37歳にその住職となるエリート学僧だった。天明2年（1782）寛永寺から善光寺別当として善光寺へ帰郷。その翌年に浅間山の大噴火が起きた。寛永寺から被災者救済の命を受けて、等順は献身的な支援を行う。この時の民衆を救う実践により、エリート学僧としての等順は真の聖職者に生まれ変わったと思われる。

天明から寛政にかけては、世の中全体が飢えに苦しんでいた時代だった。等順は民衆の期待に応え、実践宗教者として自ら民衆の中に入っていったのである。



浅間山大噴火で埋没した鎌原村の発掘調査で発見された素焼きの善光寺三尊像。鎌原村は477人が亡くなり、93人が生き残った。（群馬県嬬恋郷土資料館蔵）

④ 融通念仏と「お血脈」

善光寺信仰はこの教義とは呼べない融通念仏を根本に据えたことで、宗派に関わらず信仰を集めることができた。極楽行のパスポートである「お血脈（融通念仏血脈譜）」を授与された者には、日課念仏百回が課された。一日百回の念仏が見ず知らずの者同士をつなぎ合わせ、膨大な念仏の輪ができあがる理屈になっている。このようにして民衆の爆発的な支持を得た善光寺の「お血脈」は、等順一代で180万部を頒布し、社会現象化した。これが落語「おちみやく」の創作へとつながってゆく。この話の中に出てくるのは、本当は「お血脈」ではなく「御印文（ごいんもん・極楽行の印鑑）頂戴」であるが、それにも関わらずその名が題名となっているのは、当時「お血脈」が善光寺の代名詞であったことを示している。



大勧進の融通念仏血脈譜
包みには「此の御血脈ヲ受ル人ハ日課念佛百遍唱フベシ」とある

嘉永2年（1849）に刊行した善光寺参詣のガイドブック『善光寺道名所図会』には「御血脈頂戴の図」が掲載されている。ここではおそらく大勧進であろう建物の中で、住職から「お血脈」が一人ずつに手渡されている。絵図には「血脈をいただくけふ（今日）の嬉しさは極楽へゆく心地こそすれ」が添えられており、かつて「お血脈」を手にすることが善光寺参詣の大きな目的だったことが分かる。



「御血脈頂戴の図」（『善光寺道名所図会』巻三ノ二十三）

⑤ 善光寺廻国開帳と五重塔再建計画

諸国を回る出開帳を回国開帳という。寛政6年（1794）から3年10ヵ月にわたり等順を筆頭に善光寺一行は回国開帳の巡行をしている。等順の留守中には万善堂など大勧進の建造物が造営された。災害に次ぐ災害の時代、等順は民衆の期待に応えて「御十念」「御印文」「御加治水」により、勧進とともに救済活動をしている。

等順は不遇の時代にある民衆の祈りを、融通念仏により大きな目標に結実させようとした。それが善光寺曼陀羅であり、五重塔の再建である。善光寺五重塔は治承3年（1179）、善光寺炎上で焼失し、再建後も文永5年（1268）、正和2年（1313）と再三の火災で失われた。宝永4年（1707）の現本堂建立時にも五重塔は再建とならず、以後、善光寺の歴史的悲願だった。

等順の先代、慈薫は安永8年（1779）に五重塔再建を幕府に出願し、建築の位置や規模、費用の見積もりを立てたが、回国開帳の途中病気により逝去。等順はその遺志を引き継ぎ、かつ民衆の作善（現世来世の幸せのために善い行いをする）を実現するという融通念仏の原理に従い、不屈の精神で回国開帳に取り組んだ。驚くべきことに、飢饉に窮す

る時代において等順の勧進は一万三千両の浄財を集めるに至った。しかし、幕府の許可が降りぬまま計画は実現されず、等順の半生をかけた労苦は水泡に帰すことになった。



等順自筆大幅名号（元善光寺蔵）勧進の際、数多く授与され、名号塔が造立された。

【お血脈の頒布と御開帳の経緯】

天明4年（1784）	2月24日御開帳（居開帳）を行う。「お血脈」を簡略化し、参拝者に授ける。 7月1日～10日浅間山噴火による死者の追善大法要を行う。
5年（1785）	現本堂＜宝永4年（1707）再建＞で初めて御開帳を行う。
寛政3年（1791）	3月御開帳（居開帳）
6年（1794）	8月回国開帳（出開帳）に出る。先代慈薫の東北開帳を引き継ぎ、越後十日町から開始。小千谷・長岡・三条から富山・福井に至る。 以後3年10ヵ月にわたり、九州までの回国開帳をなし遂げる。
10年（1798）	5月松本生安寺・飯田元善光寺・高遠満光寺にて出開帳。6月佐久回りで善光寺遷座。
11年（1799）	本堂にて御開帳（居開帳）

⑥ 等順と立川和四郎富棟

等順が目指した善光寺曼陀羅は善光寺の境内を極楽浄土にすることだった。大勧進の放生池は飢民救済策という目的も合わせて造成された。欄干の擬宝珠にその由来が刻まれている。「この放生池は光格天皇の天明四年凶荒年 善光寺別當等順大僧正難民救済を発願し米銭を供して地を掘らしめ堤防を築き水を湛入して池となし蓮を植えられたれば世の人蓮池と称す・・・」放生池は生き物に感謝する放生会という法要に欠かせず、等順が構想した善光寺曼陀羅にはなくてはならなかった。

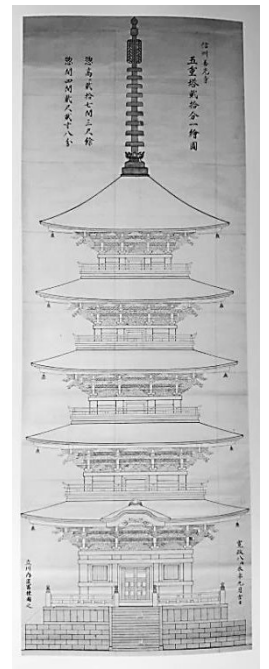
引き続き等順は大勧進の建造物を次々に整備する。この時大いに腕を振るったのが諏訪の宮大工として全国にその名を知らしめた立川和四郎富棟だった。



大勧進表大門と放生池。

【^{たてかわわしろうとみむね}立川和四郎富棟（1744～1807）】

信州諏訪の塚原忠右衛門の次男として生まれ、13 歳で江戸立川流初代立川小兵衛富房の弟子となる。その腕を認められ江戸立川家の職養子を懇望されたが、20 歳の時に諏訪へ帰り建築業を開業。当時諏訪には伊藤儀左衛門の伊藤家や村田家など藩作事方一門が腕を振るっていた。富棟はその宮彫建築に自分の腕の未熟さを悟り、明和 3 年（1766）23 歳で再び江戸へ出て宮彫を修業。同 5 年（1768）に諏訪へ戻り、上諏訪角間町に一家を構え、屋号「小澤屋和四郎」として建築請負業を始めた。茅野市塚原の白岩観音堂は宮彫修業後の第一作といわれる。安永 6 年（1777）諏訪神社下社秋宮御門屋の再建にあたる。同 9 年の上棟祭には、当社宮付の宮大工三井傳左衛門を天狗棚の正座にあげ、義を表した。善光寺においても後藤流の寺大工がいたが、寛政元年（1789）には大勧進表御門を建築。焼失した万善堂など、公認の上で多くの建築を手掛けている。富棟が等順の回国開帳の最中である寛政 8 年（1796）に制作した「信州善光寺五重塔貳拾分一絵図」は、五重塔再建のため勧進活動に使われたと思われる。



「信州善光寺五重塔貳拾分一絵図」（大勧進所蔵）それまでの五重塔には見られない彫刻による装飾が特徴。

【富棟建築の大勧進伽藍】

寛政元年（1789）	大勧進表大門建立（現存）	善光寺三尊厨子・御三卿厨子建立（現存）
8 年（1796）	万善堂再建（焼失）9 月、五重塔の図面製作（現存）	
9 年（1797）	護摩堂内仏殿再建	
11 年（1799）	昇天堂（現存）・食堂等建立・後に行在所となる奥書院（現存）もこの時建築か？	

【善光寺巡礼の道沿線に現存する富棟の建造物】

天明 2 年（1782）	矢彦神社拝殿（辰野町）
3 年（1783）	白髭神社（高森町山吹）
寛政元年（1789）	上片桐八幡社（松川町）
12 年（1800）	無極寺（松本市和田）
享和 2 年（1802）	坂北神明宮（東筑摩郡筑北村）



矢彦神社拝殿（県宝）

（2）^{とくほん}徳本名号塔

① 特徴ある書体で一番目にする名号塔

善光寺街道協議会では平成 29 年 2 月に『善光寺街道沿線の徳本名号塔とその背景』をまとめ、善光寺街道周辺地域で 172 基の徳本名号塔を確認した。近年の調査では長野県全域で 500 基あるとの報告もある。

【伊那街道の徳本名号塔】



牛牧十王堂
（高森町牛牧）

清泰寺
（松川町上片桐）

中田切橋近く
（飯島町田切）

安楽寺
（駒ヶ根市上穂）

白心寺
（宮田村）

上西条
（塩尻市）

永福寺
（塩尻市）

【善光寺街道の徳本名号塔】



言成地蔵尊 (塩尻市宗賀) 洗馬分去れ (塩尻市宗賀) 堅石蓮台場 (塩尻市広丘) 大慈堂 (松本市出川) 村井観音堂墓地 (松本市村井) 松岡墓地 (松本市岡田) 青柳宿 (筑北村坂北)



浄信寺 (長野市塩崎) 北原大仏殿跡 (長野市今井) 浄生庵 (長野市丹波島) 十念寺 (長野市西後町) 西方寺 (長野市西町) 寛慶寺 (長野市東之門) 善光寺 (長野市元善町)

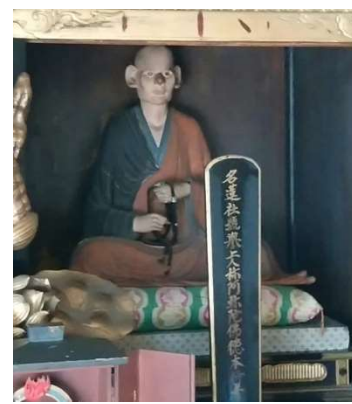
【徳本上人肖像】



清 泰 寺
(松川町上片桐)



徳 本 水
(辰野町伊那富)



善 導 寺
(長野市稲里下氷鉦)

② 念仏行者徳本 (1758～1818)

徳本は近世末浄土宗において最も大きな教化を残した念仏行者。紀州日高郡（現和歌山県日高郡日高町）に生まれ27歳で出家。20余年山中にこもる難行苦行の後に霊場・遺跡を巡礼し、各地で教化のため行脚した。文化11年（1814）春、江戸増上寺第56世典海大僧正の懇請により小石川の清浄心院に留錫。身分の上下を問わず帰依者が群参し、紀伊・尾張・田安・一橋等、親藩をはじめ92の諸侯も帰依した。同年8月から地方教化の行脚を続け、伊豆・相模・下総・信濃・飛騨・越中・加賀に及び、文化14年（1817）江戸一行院に入り中興開山した。文政元年（1818）最後まで念仏を唱えて生涯を終えた。

徳本上人肖像（長野市南原蓮香寺蔵）



③ 信濃での教化活動

文化 13 年（1816）4 月から 8 月にかけて、徳本はほぼ信濃全域にわたり巡錫した。逗留の最多日数は上諏訪の貞松院 15 日間。これについて長野市域では寛慶寺へ 13 日間、西方寺には 3 度にわたり 7 日間、この他善光寺街道筋では小市の無常院と小松原の光林寺へそれぞれ 3 日間、原村の蓮香寺と塩崎の天用寺へそれぞれ 4 日間。松本市では城下町本町の生安寺へ 3 日間逗留している。刷り物の小幅名号授与数でいえば、一万枚以上が 6 箇所あり、寛慶寺の 25,761 枚、飯田峯高寺 24,435 枚、上田願行寺 21,000 枚、長野西方寺 18,802 枚、上諏訪貞松院 17,147 枚、高遠満光寺 11,300 枚となっている。その他の逗留地においても 1,000 枚以上がほとんどで、いかに徳本上人の行く先々に人々が群参したかがうかがえる。これ以外に乞われるまま精力的に自筆名号を書き与えた。



徳本上人自筆名号（蓮香寺蔵）

④ 名号塔の造立

『徳本行者諸国名号石記』（徳本の弟子、本極和尚著）には名号塔が次々に造立される様子が記録されている。氷鉋（ひがの）村八幡原の名号塔は 4 月 24 日に名号が染筆され、5 月 10 日に名号塔の開眼法要が行われた。貝沢村では 5 月 4 日に書いてもらい、13 日に開眼法要がなされた。これら驚異的なスピードでの建立は、既に石材を用意して、それに見合う大きさの名号授与を願い出ていることに起因するが、第一に腕の良い石工集団の存在なしには考えられない。高遠石工が関係しているようだが、詳細は明らかにされておらず、今後の研究を待ちたい。

徳本上人は講の規模により大きさに差をつけ、また、建立場所は人の目に着くところを指示した。それは、徳本の教化の目的が大寺院を建立することにはなく、草の根の念仏講を組織することにあつたからである。

これら名号の授与にともなう供養物は草餅・柏餅などの餅や砂糖・氷砂糖・金平糖などの菓子類、そば粉や米などの穀類、唐紙や半紙などの紙類など様々で、衣類や薬まであつた。徳本は通常蕎麦と人参しか

口にしなかったため、現在でも念仏講の御供え物には人参と蕎麦を供える風習が残っているところがあるという。

徳本の信濃巡錫は等順が善光寺別当職を辞任して 15 年後のこと。等順も念仏講を組織することに奔走し、大きな成果をあげていたことを考えると、徳本名号碑建立への熱狂には等順による融通念仏の教化が基盤としてあつたことが影響したと考えられる。



半月で建立した八幡原の徳本名号塔（高さ 220 cm）



百人で石材を搬入してから 3 日で完成した西方寺の名号塔（高さ 413 cm）



寛慶寺の名号塔は徳本が直接石に名号を揮毫して、3 日で開眼法要を行っている（高さ 289 cm）